

巖氏命名。

本號は先生の祝賀記念號としては何等の趣向もなく申譯ないことであるが、實は既にあらかた編集を了つてから急に記念號にすることになつた爲で先生始め讀者各位の御寛恕をひとえに冀う。(學會幹事 高島春雄)

## 太平洋戰爭中に於ける國內動物學關係研究 機關・學會・出版等の大勢

高 島 春 雄 ・ 野 村 健 一

財団法人山階鳥類研究所

中央氣象臺大和田出張所

The tendency of research organizations, scientific bodies or publications connected with zoology in Japan during the Pacific war

Haruo Takashima & Ken'ichi Nomura

目	次
I ま え が き.....51	IV. 出版界の状況.....62
II 研究機關の状況.....52	V む す び.....67
III 學會の状況.....58	

### I ま え が き

本篇は、戦時中に於ける我が動物學界の趨勢を要述したものであるが、対象期間の範圍は、便宜上昭和16年1月(1941)より同20年8月(1945)までを採る

ことにした。但し、項目によつては、更にこの範圍を越えたものもある。本稿は高島及び野村合議のもとに分担執筆したもので、昆虫を含めた應用動物關係のものは主として野村が、他は高島が分担した。しかし高島の支障により野村が代行したところもあり、一般動物方面がやや手薄となつた。従つて、全体としては均衡のとれない感もあるが、この点は豫め御諒承を願いたい。

筆者等は、苦難に満ちた5年間を顧る時、まことに感慨深いものを覚えるのであるが、今にして思えば、これも一つの試練であり、又貴重なる体験であつたと思う。ただ本篇がこの間の動向を正しく伝え得るや、筆者等は危惧の念なしとしないが、幸に各位より多大の御支援を賜り、ともかくも一應その責を果し得たことは、望外の喜びとするところである。ここに御高示を辱うした各位に對し、深甚なる謝意を表する。

## Ⅱ 研究機關の状況

### A 主なる研究機關とその動き

研究機關そのものは、戦前と大した變化がなく、唯若干の新設或は擴張を見た程度である。しかし、その研究及び活動面に於ては、かなり變動もあつた。特に研究テーマについては、應用問題或はそれに關聯の深い基礎的問題への轉向が目立つた。次に主なる研究機關について、これを要述して見よう。

#### (1) 一般動物學 [大學關係]\*

1. 北海道大學理學部動物學教室(教授小熊捍・内田亨・犬飼哲夫3氏、但し犬飼氏は兼任):細胞學・生理學(特に感覺生理)の如き基礎的研究の外、鳥獸の生態に關する研究など廣汎なテーマを擁し、又低溫科學研究所(所長小熊捍氏)との關聯になる諸研究も一特色である。なお終戦直後は「生物」の編集發行を通じての貢獻が目された。

2. 北海道大學農學部動物學教室(教授犬飼哲夫氏):主として農業動物に關する諸般の研究が行われた。

3. 東北大學理學部生物學教室(教授朴澤三二・野村七録・元村勳3氏):分類・

\*ここに挙げたものは、5.8を除き何れも當時は「××帝國大學」という名稱であつたが、本稿では現名稱をとつて「帝國」の2字は省いた。

生態・生理の各方面が研究せられたが、海産動物に取材したものが多く、昆虫関係のものは別項参照。

4. 東京大學理學部動物學教室（教授岡田要・合田得輔・鎌田武雄3氏）：實驗形態學・生理學・生化學方面の研究が主として行われた。外に日本動物學會の本據としての諸活動も特筆すべきものである。

5. 東京文理科大學動物學教室（教授高槻俊一・丘英通2氏）：生理學及び實驗形態學の研究を主とする外、分類方面にも貢献が多かつた。又日本動物學會の事務の一部（編集）も分担。

6. 名古屋大學理學部生物學教室（教授佐藤忠雄・山本時男2氏）：主として發生及び生理學方面の研究に力が注がれたが、魚類を取扱つたものが多い。

7. 京都大學理學部動物學教室（川村多實二・駒井卓・岡田要3氏、但し岡田氏は兼任にて後に解任、又川村氏退官され、宮地傳三郎・市川衛兩氏加わる）：遺傳・生理・生態の諸方面に貢献があり、生態方面では水棲動物に取材したものが多く、なお終戦後には、本教室を中心とする「生理生態」の編集が注目された。

8. 廣島文理科大學動物學教室（教授阿部余四男・尾崎佳正・平岩馨邦3氏）：ネズミに關する研究をはじめ、細胞學・寄生蟲學などの研究が行われ、又昆虫やダニに關する研究も展開された。

9. 九州大學農學部動物學教室（教授大島廣氏）：分類學に關する研究が主で、特に海産動物に取材したものが多く、なお、第2講座（昆虫學）（江崎悌三教授）については、昆虫の項を参照。

10. 台北大學理農學部動物學教室（教授青木文一郎・平坂恭介2氏）：哺乳類の分類學的研究その他に貢献があつた。又海南島その他南方諸地域の學術調査にも少からぬ寄與があり、更に昭和18年より終戦までは台灣博物學會會報の編集をも担当。なおこれら各大學の附屬實驗所に於ても、それぞれ特色ある研究が展開されたが、特に臨海實驗所に於ては、後述する「木船虫害防除研究委員會」への參加研究が注目された。

〔そ の 他〕

大學關係以外でも、各専門學校及び文部省資源科學研究所（昭和16年12月設立、動物學部主任岡田彌一郎氏）・東京科學博物館などが、それぞれの立場に於て活動した。又軍關係の研究機關でも、毒蛇の研究など特殊な問題が取扱われた。この外、滿洲に於ける大陸科學院及び國立博物館、上海に於ける自然科學研究所、パラオの熱帶生物研究所なども記憶さるべきものであり、又短期間ではあつたが、海外現地に新設された諸機關も、邦人動物學者の赴任を得て若干の貢獻をなした（例えば南京の行政院文物保護委員會研究部）。なおここに附言すべきものに、大東亞博物館がある。これが設立の議は、一時かなり具体化したのであるが、戦争の荷烈化更に終戦という新事態に遭遇して、遂に實現を見るに至らなかつたのは、斯學のため遺憾に堪えないところである。

(2) 應用動物學 昆虫學に關するものは次項で述べる。水產學關係の研究機關としては、既設の各大學農學部水產學科・農林省水產試驗場・水產講習所などは主なるものであり、南方魚類の研究その他が行われた。又これらに加え、創設早々の資源科學研究所の存在も注目され、天然資源開發の觀點よりする魚介増殖（淡水魚・イセエビ等）・發光動物・蚊族驅除に對する魚類の利用、などの諸研究が展開された。なお各大學及び附屬臨海實驗所・資源科學研究所・陸海軍・塗料會社などをメンバーとした「木船虫害防除研究」（學振、第22特別委員會）の設置も注目すべきものであり、フナクイムシ等に關する綜合研究が實施された。この外、これに類した各研究機關の共同研究としては、船底塗料の問題があり、又戦争末期に於ては救荒動物の研究も採り上げられた。なお實驗小動物の飼育法及び大量増殖に關する研究も、各所連携のもとに行われた。

蚕絲關係では、各大學農學部の養蚕學（蚕學）教室及び農林省蚕絲試驗場をはじめ、各纖維専門學校（東京・京都・上田）及び府縣立蚕絲試驗場等が挙げられ、又諸製絲會社の附屬研究所も見逃すことが出来ない。更に昭和17年に新設された財團法人蚕絲科學研究所の存在も特筆されてよからう。これらの諸機關に於ける研究動向は詳述を省くが、蚕のみならずヒマ蚕などについても相當の關心が拂われたこと、又蚕に取材した遺傳學の研究も並行されたことを附言しておく。

以上の外、上掲(1)〔一般動物學〕に示した諸研究機關に於ても、いろいろな形に於て應用問題に觸れたものが少くない。例えば、北大に於ける軍用犬や傳書鳩の生理學的研究などは、この好例といつてよからう。

### (3) 昆 虫 學

1. 北海道大學農學部昆虫學教室(教授内田登一氏): 本教室の傳統たる分類學的研究に加えて、森林害虫及び衛生昆虫に關する研究も展開された。又戦後は「松虫」の編集を通じての貢獻が大きい。

2. 東京大學農學部動物學教室(教授鏑木外岐雄氏): 農害虫及び衛生昆虫に關する研究を主とし、特に前者に關聯したニカメイガの趨光性に關する研究が特筆される。なお應用動物學會を主宰し、この方面での寄與も少くなかつた。

3. 農林省農事試驗場昆虫部(後に害虫部と改稱)(主任木下周太氏、後に湯淺啓溫氏): 農害虫の生態及び防除に關する研究の外、農藥方面の業績も多々ある。又支場や府縣農事試驗場に對しての指導的役割も小さくなかつた。なお、日本應用昆虫學會の事務所としての活動も看過出来ない。

4. 京都大學農學部昆虫研究室(教授春川忠吉氏): 農害虫及び貯穀害虫に關する實驗生態學的研究を主とし、外に燻蒸などに關する研究もあつた。

5. 九州大學農學部昆虫學教室(教授江崎悌三氏): 分類學及び分布學に關する研究(南洋に取材したものが多し)を主とし、後期には衛生昆虫(ノミ)の生態學的研究も行われた。なお農林省委託のウンカに關する研究は従前通り繼續、又同教室の主宰する「むし」「Zephyrus」を通じての文獻活動も注目された。

6. 台北大學理農學部昆虫學教室(教授素木得一氏、後に一色周知氏): 分類及び生理に關する研究を主とし、この外ヒマ蚕の研究なども展開された。又昭和17年まで台灣博物學會會報の編集を担当。

以上の外、農害虫に關しては、北海道農事試驗場・農林省農事試驗場各支場・東京農業大學・各農林專門學校・各稅關植物檢査課なども重要研究機關であり、又各府縣立農事試驗場の存在も記憶さるべきものである。なお朝鮮・台灣・樺太・滿洲に於ては、それぞれ中央の試驗所が中樞的役割を演じた。

次に衛生害虫關係では、上記の外に傳染病研究所・北里研究所・資源科學研

究所・東北大學理學部生物學教室などが挙げられ、又醫科方面の研究機關でこれに關係を持ったものには、台北大學醫學部衛生學教室・同熱帶醫學研究所・京城大學醫學部衛生學教室・慶應義塾大學醫學部豫防醫學教室・大阪大學微生物病研究所などがある。又ここに特筆しておきたいのは、陸海軍研究機關の参加で、軍醫學校はその中心であつた。

これらの諸機關の中、軍關係のもの及び農林省農事試験場支場・資源科學研究所などは、本期間中に新設又は擴張を見たものである。なお資源科學研究所には、日本昆虫學會及び日本衛生昆虫學會の事務所も置かれていた（現在も同じ）。

#### (4) 衛生動物學 (寄生蟲學・原蟲學)

衛生動物學の中、昆虫關係のものは先に記した通りであるが、この外寄生蟲學及び原蟲學等に関しては、主として醫學方面の研究機關に於て取扱われた。その主なるものを示せば、台北大學醫學部寄生蟲學教室（教授横川定氏）及び衛生昆虫學の項で示した醫科關係の諸研究機關である。なおこの外、獸醫關係では東京大學農學部獸醫學教室（教授板垣四郎氏）・陸軍獸醫學校・獸疫調査所などが挙げられる。

以上が各方面の主要研究機關であるが、これらが高度にその機能を發揮し得たのは、大抵昭和18年までで、19—20年にかけては後述する疎開或は戰災等により、大都市にあるものほど能率が低下した。なおこの期間に於ては、文部省科學研究費の支給は概して潤澤であり、又一部には軍部の支持などもあつて、研究費の面では比較的恵れた。しかしその半面諸資材特に藥品類の不足は年と共に著しく、かかる点では相當制約を受けた。なお、各種委員會或は研究班などの設置により、各研究機關相互間の連携は、この時代に於て極めて緊密であつたことも指摘しておきたい。

#### B. 疎開・戰災及び復興の概要

各研究機關の疎開が問題になつたのは、昭和19年の秋頃からであるが、しかし實際にこれが實現を見たのは、昭和20年に入つてからである。東京に於ては、3月10日の大空襲が大いにこれを促進した。

疎開の規模はまちまちであるが、多くは標本及び文献の疎開が主であつた。東大理動物學教室では、各講座毎に一部人と物とを疎開したようであるが、このように研究者も共に疎開した例はむしろ少かつた。なお大都市ほど疎開に熱心であつたことはいふまでもない。

大學關係では疎開先として附屬實驗所を利用するものが多く、又農林省農事試験場の如きは各支場を利用した。このように足場を持つたものでは、比較的圓滑に行われたが、然らざるものでは疎開先の探索から始めねばならず、しかもまとまつた疎開が許されない場合も少なくなつた。例えば資源科學研究所の動物學部は、本部の外に4分室に分散した。かかる疎開によつて、各研究機關ともにその機能は相當低下を余儀なくされた。

次に研究機關の戦災であるが、幸に大學關係は後述するものを除き殆ど全部戦災を免れ、又その他の研究機關も概ね無事であつた。東京で高等動物の標本資料を多數所藏する學習院・農林省鳥獸調査室・山階鳥類研究所なども、幸にして難を免れた。しかし、この間にあつて、名古屋大學・廣島文理科學大學・東京農業大學・資源科學研究所・蚕絲科學研究所など戦焼を蒙つたのは残念である。又鷹司信輔・黒田長禮兩氏のコレクションも全滅した。なお戦災を免れた所でも、日本軍に建物を徴發され、散々荒された所もある（東京科學博物館及び文理大下田臨海實驗所など）。又疎開その他により器材・標本・文献等の破損紛失した事實も相當あり、かかる面では多かれ少なかれ損失を受けた。

戦災した諸機關の復興は、終戦後の惡條件に災されて、容易に進まず、特に罹災を機に移轉を余儀なくされたものでは、この影響が甚大であつた。しかし、昭和21年末頃には、各所ともほぼ立直りを見せ、例えば東京農業大學は世田谷の陸軍自動車學校跡に、又資源科學研究所及び蚕絲科學研究所は淀橋百人町の陸軍第6研究所跡にそれぞれ再整備をとけた。なお戦焼を免れた所でも、疎開の復歸等に相當手間取り、終戦後約1箇年は完全な復活には至らなかつたようである。

なお軍關係の諸研究機關は、終戦と共に大部分のものは自壊し、せつかくの施設や資料を空しく散逸したことは、學界のために惜しむべきことである。海外に在つた研究機關も、同様の運命に遭遇したことはいふまでもない。

なお附録として、各地の動物園の變遷を略記しておこう。東京都上野動物園

では、戦時中猛獣を処分し、巨獣や大形爬虫類も食糧難又は暖房難で相次いで斃死した。更に空襲によつて園内の一部が焼失し、終戦の頃にはひどいさびれ方になつてゐた。他の動物園もほぼ同様で、終戦近くには閉園してゐたところもある。中には甲府市動物園の如く、全焼且つ全動物が焼死したような例もある。戦後は各動物園とも園内の整備及び動物の補充に新たなる努力を傾けたが、ライオン・虎・豹などの国内ストックは全滅し、内容の復興は遅々として進まない。この間にあつて、名古屋市東山動物園が牝象2頭を温存させたのは偉とすべきである。

## Ⅱ 学 會 の 状 況

昭和17—18年にあつては、學會の景況も概ね好調であつたが、戦争の苛烈化と共に漸次低下し、戦後の復興も遅々としている。

### A 学 術 大 會 の 開 催

(1) 一般動物學關係 先ず本邦斯學の中核である日本動物學會の動きを見るに、昭和16年は例年の大會を自肅的に中止した。しかし、翌17年には10月24—26日に亘り、東北大學理學部生物學教室が主催者となり、仙台市齋藤報恩會講堂にて第17回大會を開催した。参加者は遠く滿洲・台灣・上海などよりも來會を見て150名に近く、頗る盛會であつた。なおこの大會で、昭和16—17年分の學會賞が下記の4氏に授けられた。〔昭和16年度〕福田宗一氏（家蚕に於ける化性の決定と蚕卵漿液膜の着色）、徳田御稔氏（日本及び滿洲産鼠類の分類）

〔昭和17年度〕高谷 博氏（Experimental study on limb-asymmetry）、川村智治郎氏（3倍數トノサマガエルの性について）

第18回大會は東京文理大動物學教室が主催者となり、昭和18年10月2—3日東京科學博物館講堂にて開催された。出席者は傍聴者などを加えると400名に近く、近年にない盛會であつた。又本大會開催を機に「南の動物展覽會」も開かれ、なお4日には3班に分れての見學も行われた。因に同年度に於ける學會賞受賞者は次の兩氏である。

中村 治氏（Die Entwicklung der hinteren Körperhälfte bei Urodelen.）、挾間文一氏（Ueber die Biolumineszenz bei *Pyrocoelia rufa* in Aktionsstrombild sowie in histologischem Bild.）



上記の如く、昭和17—18年の大會は豫想外の盛會であり、又南方に取材した研究發表などもあつて、特色ある大會を描き出したのであるが、この頃より戦局は次第に不利となり、翌19年からは大會は開けなくなつた。又月例會も19年12月までは開催されたが、20年に入つては全面的に停止を余儀なくされ、21年6月の再開まで約1年半がブランクとなつた。なお動物學會以外では、日本生物地理學會・貝類學會・陸水學會なども、それらの學會事務所たる資源科學研究所に於て、時々大會或は例會を開催し、又鳥學會も屢々例會を開いた。しかし、戦争後期に至つては、自然消滅の形であつた。

(2) 應用動物學關係 毎春行われる日本農學會は、本期間内では昭和16・17・18年に開催されている（於東京大學）。この中の部會として、應用動物學關係では水産學會・畜産學會・蚕絲學會・應用動物學會・應用昆虫學會等があり、それぞれ大會を開催した。後の2者については次項で述べる。

このように、大會は昭和18年まで毎年行われたが、學會としての景況もかえつて17—18年に於て盛んであつたといえよう。即ち、17—18年にあつては、非常時体制に即應して研究發表が活潑であり、新局面を思わせるものが少なくなつた。もつとも、蚕絲學會は開戦以降の蚕絲業界の不調を自ら反映し、いささか沈滞氣味であつたことは否定出来ないようである。

(3) 昆虫學關係 昆虫學關係のものでは、上記日本農學會の一部として行われるものと、日本昆虫學會主催に係るものがある。なお19年以後は情勢の逼迫により、共に開催を見なかつた。

昆虫學關係の大會一覽表

學 會 名 年 次	應用動物學會・應用昆虫學 會合同大會（日本農學全）	日本昆虫學會大會
16	4月5日、於東大農學部	開催なし (情勢惡化のため)
17	4月5日、於東大農學部	10月23日、於東北大理學部 (第5回大會)
18	4月11日、於東大農學部	10月1日、於農林省農試 (第6回大會)

昆虫學關係に於ても、昭和17—18年の方が16年よりむしろ活況であり、又南方問題特に衛生昆虫學の擡頭が注目された。

(4) 衛生動物學關係　寄生虫學會總會も昭和18年まで毎春開催された(東京大學醫學部)。しかし、それ以後は遂に開かれなかつた。ここでは、寄生虫學及び衛生昆虫學\*に關する問題が取扱われた。又獸醫學會も、上記日本農學會の1部門として昭和16—18年にかけて大會を開いた。

## B. 會 誌 の 發 行

上記のように、大會の開催は昭和17—18年にかけて、やや挽回した觀があるが、會誌の發行は年と共に不調の傾向が現われた。各學會とも日本出版文化協會への加入により、用紙は或程度確保されたのであるが、印刷所難・規格の統一(昭和16年に實施さる)・頁數の制限、などによつて、學會機關誌の發行も次第に不規則となつた。例えば、比較的順調であつた「動物學雜誌」でさえ、昭和17年秋頃から發行が遅れ氣味となり、又頁數も32頁に縮減されるという状態であつた。而して19年6月發行の第56巻第4・5・6合冊號を最後に、以後は21年3月まで休刊状態に陥つた。他誌もほぼ同様で「應用動物學雜誌」は19年7月、「昆虫」は19年8月、「應用昆虫」は18年10月の刊行をそれぞれ最後として、以後休刊を續け現在に至つている。ただし、この間にあつて台灣博物學會が、その會報第33巻第242—3號(1943)を素木得一博士還曆記念號に當て、厖大なる一書をものにしたことは偉觀である。なお、印刷事情がいよいよ惡化した19年末より20年にかけては、論文集と抄録誌との分刊、印刷所疎開即ち印刷を地方の印刷所に依頼すること、なども議せられた。しかしこれは殆んど實行を見ない中に終戦となつた。なお戦災のため會誌を焼失した例もかなりあり、「衛生昆虫」の創刊號も惜しくも刊行直前に焼けた。

## C. そ の 他 の 活 動

日本動物學會・日本昆虫學會は、科學博物館に於て「南の動物展覽會」を開催した。これは當時に於ける南方研究熱に應えたものである。

---

\*衛生昆虫學に關するものは、昆虫學の大會に於ても多數取扱われ、兩學會にまたがるわけである。

昭和19年、全日本科學技術聯盟に於て、「生物總覽」の刊行が企畫せられた時には、關係各學會がこれに協力した。なお陸水學會では「日本湖沼學文献目錄」(吉村信吉編, 1944)の刊行をあえてしたことも特筆されてよからう。

その他としては、日本學術振興會の援助により發足した「日本產動物種族調査會」(昭和17年設立)やその他の特殊研究への協力、及び研究調査の斡旋(例えば山西學術調査團の昆虫コレクションは日本昆虫學會を通して各専門家に調査が依頼された)、なども挙げられる。しかし、これらの活動も、情勢の悪化した昭和19年以降にあつては殆ど見るべきものはなかつた。

#### D. 學 會 の 戦 災

資源科學研究所の戦災は、ここに事務所をおく日本昆虫學會・日本衛生昆虫學會・日本貝類學會・日本生物地理學會・日本陸水學會などの諸學會に大きな打撃を與えた。又東亞蜘蛛學會・日本鳥學會も事務所の焼失により會誌バックナンバーを全滅させた。この外、印刷所に於て原稿や會誌を焼失した例もあり、間接的な被害も少くない。

#### E. 學 會 の 新 設 及 び 解 散

昭和18年10月5日、日本衛生昆虫學會の設立を見たことは、當時の時局を反映するものとして注目し値する(事務所は資源科學研究所内)。同日東京大學醫學部に於て盛大なる發會式及び記念講演會が催された。これは前年以來在京有志によつて結成されていた「衛生昆虫學談話會」の發展したもので、醫學者及び昆虫學者を結ぶ學會として發足したものである。本會は現在も活動を續けている。この外、昭和17年には熱帶醫學會(台北大學醫學部内)及び農業氣象學會(中央氣象台内)の創設を見た。前者は衛生動物學に、又後者は農昆虫學に關係を持ち、それぞれの立場に於て寄與する所が少くなかつた。後者は現在に繼續しているが、熱帶醫學會が終戦と共に解消したことは残念である。台灣博物學會・朝鮮博物學會なども、終戦に伴い自然解散の形となり、多年にわたる活動に終止符をうつた。

以上が學會活動の大要であるが、これを要するに新局面に臨んだ昭和17—18年(特に17年)が最盛期に當り、以後は急激に減退を辿つたことが指摘されよ

う。ただし興味あることは、アマチュア諸氏の活動消長は必ずしもこれと比例せず、例えば昆虫関係では19—20年に於ても一部人士の活潑な動きが注目された。\*

#### IV 出版界の状況

學會の機關誌については、既に述べたことであるから、その他の出版物関係について一瞥する。

##### A. 單 行 書

本期間内に發行された動物關係の圖書は甚だ多いが、\*\* 代表的なものを挙げれば次の如くである。

(1) 學術書或は参考書 大島廣・岡田彌一郎兩氏編纂の「系統動物學第1卷」(養賢堂, 1943)は第1に挙げられるものであり、この他徳田御稔氏の「日本生物地理」(古今書院, 1941), 八木誠政・蒲生俊興兩氏の編著「溫度と生物」(養賢堂, 1942), 永野爲武氏の「理論生物學論叢」(昭和書房, 1943), 田中義麿氏の「動物育種遺傳學」(養賢堂, 1943)なども特色ある勞作といえよう。又岡村周諦氏の「動物實驗の指針」(大觀堂書房, 1941), 小野田勝造氏の「原色圖說動物大辭典」(中文館書店, 1943)も記憶に残るものである。次に各論として、水産關係では、山本時男氏の「魚類の發生生理」(養賢堂, 1943), 澁澤敬三氏の「日本魚名集覽」(3冊, 日本常民文化研究所, 1942—44), 松下高・高山謙治兩氏の「鮭鱒聚苑」(水産社, 1942)などが挙げられ、又多少系統は異なるが、土屋靖彦氏の「水産食物化學」(雄山閣, 1941), 岡本正一氏の「漁業發達史(蟹罐詰篇)」(霞ヶ關書房, 1941), 谷川英一氏「水産細菌學」(生活社, 1943), 太平洋協會編「太平洋の海洋と陸水」(岩波書店, 1943)も記録しておきたい。檜山氏の著は後述の通り。

次にその他の特殊部門を取扱つたものでは、大島正満氏の「大東亞共榮圈毒蛇解説」(北隆館, 1944)があり、又昆虫學關係では、徳永雅明氏の「醫用昆虫學」

\* 杉俊郎：終戦後の東京近傍アマチュア昆虫界展望, 松虫, 第2巻第3—4, 1948

\*\* 昆虫關係のものは、他誌に掲出の野村の記録に各年別に目録が出ているから、詳細を知りたい方はそれを参照願う。又「動物學雜誌」の新著紹介欄も参照されたい。

(上巻 診療經驗社, 下巻 金原商店, 1943), 進士織平氏の「日本蚜虫總説」(修敎社, 1941) 及び「虫癭と虫癭昆虫」(春陽堂, 1944), 松下眞幸氏の「森林害虫學」(富山房, 1943), 江崎悌三・野村健一兩氏の「土壤昆虫の生態と防除」(養賢堂, 1943), 桑山覺氏の「北方の農作害虫」(北方文化出版社, 1943), 河野常盛氏の「米穀貯藏の研究」(河出書房, 1941, 貯穀害虫の記事多し), 恵利蚕研究會(編)の「恵利蚕飼育法」(中文館書店, 1944), 田中義麿氏の「蚕學」(興文社, 1943) などが挙げられる。(南方關係書は後掲)。又畜産及び衛生動物學方面では, 増井清氏の「家畜比較解剖學」(養賢堂, 1943), 横川定・森下薫兩氏の「最新人体寄生虫學提要」(吐鳳堂, 1941), 小泉丹氏の「蛔虫の研究」(大日本出版株式會社, 1944) などが注目された。

なおここに忘れてならないのは, 外地特に南方關係のものも相當現れたことである。この例としては, 河出書房刊行の「南洋諸島」(1940), 徳田御稔氏の「大東亞の動物」(精華房 1944), 山根甚信氏の「東印度の畜産」(養賢堂, 1943), 檜山義夫氏の「南洋有毒魚類調査報告」(日本水産研究所, 1943, 非賣品), 江崎悌三氏の「太平洋諸島の作物害虫と防除」(日本評論社, 1944), 内藤良一・河野寮園兩氏の「マラリヤ傳播蚊の撲滅」(北隆館, 1944), 菅島泉氏の「台灣の蜘蛛」(東都書籍株式會社, 1944), 宮川米次氏(編)の「新撰熱帯病學」(南山堂, 1944) などが挙げられる。

以上の外, シリーズものとして, 共立出版株式會社刊行の「生物學の進歩」, 研究社刊行の「日本生物誌」(第4巻の昆虫のみ刊行), 金原商店刊行の「原虫に因る熱帯性疾患」(熱帯醫學叢書IV), 河出書房刊行の「科學新書」なども, 斯學に貢献するところが少くなかつた。

(2) 啓蒙書或は趣味的なもの 當時流行のいわゆる「科學する心」に應えて, 啓蒙的な圖書も多數刊行された。鈴木哲太郎氏の「動物の生態」(高田書院, 1943), 田中茂徳氏の「魚の常識」(北光書院, 1943), 中西悟堂氏の「昆虫歳時記」(高山書院, 1941), 仁部富之助氏の「野の鳥の生態, I—II」(日新書院, 1941—42), 東光治氏の「生物曆」(人文書院, 1941), 中原孫吉氏の「日本の動物季節」(朝日新聞社, 1943) などはその好例である。又昆虫では, 大町文衛氏の「日本昆虫記」(朝日新聞社, 1941) や矢野宗幹氏の「蟻の世界」(岩波書店,

1943) などが出た外、時局を反映して岡田彌一郎氏の「害虫と家庭衛生」(河合商店, 1942), 堤勝氏の「蠅」(日新書院, 1942) の如き衛生昆虫関係のものが現れたことも注目される。なお少國民向きの圖書も多數刊行され、高島春雄の「動物園での研究」(研究社, 1942), 高橋敬三氏の「海岸の動物研究」(研究社, 1942), 芹澤喜三氏の「少年昆虫記」(清水書房, 1942) の如きをその例とする。

これらは、主として國內問題を取扱つたものであるが、外地特に南方に取材したものも多數刊行された。その例には、三吉朋十氏の「南洋動物誌」(モダン日本社, 1942), 柴田桂太外諸氏の「南の生物」(千歳書房, 1943), 蜂須賀正氏氏の「南の探検」(千歳書房, 1943), 谷津直秀氏の「生物紀行」(三省堂, 1943), 常木勝次氏の「戦線の博物學者」(日本出版社, 1942), 清棲幸保・安松京三氏らの共著「山西學術探検記」(朝日新聞社, 1943), 石井悌氏の「南方昆虫紀行」(大和書房, 1942) などが挙げられる。かの鈴木徑勳氏の原著「南方風物誌」(明治26年)が、江崎悌三氏の解説つきで再刊されたのも、この1例と見てよからう(日本講演協會, 1944)。又少國民向きのものにも、古川晴男氏と高島春雄の「南の動物」(光風館, 1942) などが現れた。なお山田致知氏の「動物生態寫真集」(柳原書店, 1942) も、豪華な一本としてあえて挙げておきたい。

〔附 記〕 ここに掲げたものも、その内容に於ては、むしろ専門書とすべきものがあり、上掲の「學術書或は參考書」との區別は、便宜的に設けたものであることを諒承されたい。

(3) 譯 書 譯書も少からず刊行されたが、南方関係のものが最も多く、特にウォーレスのものが多數現われたのは、やはり時局の影響であろう。これに該當するものには、谷田專治氏譯の「熱帶の景觀」(創元社, 1942), 赤木春之氏譯の「生物の世界」(東江堂, 1942), 南洋協會譯の「マレー諸島」(南洋協會, 1942) などがある。又外にヨング原著岡田彌一郎氏譯の「大珊瑚湖海の自然」(大日本出版株式會社, 1943), ダンメルマン原著内田清之助・堀口守兩氏譯の「東印度諸島の生物(保護と保存)」(白楊社, 1944) などが出た。オーベルベーク・ストーカー原著山岡節男氏譯の「蘭領印度のマラリヤとその防遏」(金原商店, 1943) も、内容は大部分が媒介蚊に關するものである。

以上は何れも南方関係のものであつたが、この外ノルマン原著黒沼勝造氏譯の「魚の博物學」(大日本出版株式會社, 1943), イムス原著石倉秀次・深谷昌次

兩氏譯「昆虫學最近の進歩」(三省堂, 1943)を得たことも當時の一收穫であり、又ブックストン原著澁谷壽夫氏譯の「沙漠の動物生活」(生活社, 1943), ホイラー原著澁谷壽夫氏譯「昆虫の社會生活」(創元社, 1941)なども特筆されてよいものであろう。なお、プアブルのものも「昆虫記」(岩波書店, 1941, 1942)その他が出た。

#### (4) 文献目録 文献目録には次のものがある。

文部省(編): 東亞共榮圈資源科學文献目録(ニウギニア), 1942, 岩波書店。

——: 全上(佛印・泰國), 1942, 岩波書店。

吉村信吉(編): 日本湖沼學文献目録, 1944, 陸水學會。

〔附 記〕 東亞共榮圈資源科學文献目録のその他の地方のものは、資源科學研究所に於てその後續刊された(非賣品)。

以上が本期間に現われた動物關係の主要單行書であるが、この外再版ものや覆刻版(例えばManson: Tropical Diseases, 科學振興文献會, 1943)も若干あり、なかなか多彩であつた。なおその半面では、せつかく企畫或は着手されながら、遂に出版を見なかつたものもある。臺灣總督府で企畫された「南方大系」の如きものはその代表例である。南方關係のものでは、刊行寸前で終戦にあい、そのまま葬られたものが少くないのは、學界のため遺憾なことに申さねばなるまい。

### B. そ の 他 の 刊 行 物

學會機關誌及び單行書以外の刊行物としては、各研究機關の報告類がある。しかし、概してこれらは不振であつた。

この中で見るべきものとしては、資源科學研究所より刊行された「東亞共榮圈資源科學文献目録」がある。これは地域別に分冊となつて刊行された。なお同研究所では、創設以來多くの報告・特別報告・彙報(彙報は叢書の別名で發賣された)を發刊し、各方面の注意をひいたことも附記しておきたい。

これらの研究報告の類では、臺灣關係のものが比較的最後まで健在ぶりを示した。昭和19年に發刊された素木得一氏の棉作害虫に關する報告(臺灣總督府外事部報告, 165)の如きも231頁の龐大なもので、我々の眼をみはらせたもの

である。なお軍関係のものはその多くが秘扱いであり、一般には配布されなかつた。又南方現地に於ける出版活動は、概して振わなかつたが、啓蒙的なものは若干發行された由であり、又占領直後にあつては、接收原稿を日本軍の手で印刷配布したもあつた（例——Tweedie: Poisonous Animals of Malaya, 1942）。

なおこの時代の一特色として指摘されることは、特殊な委員會或は研究會の設置に伴い、それらの特別報告の印刷を見たものが若干あることで、又研究費による私刊出版物の現れたことも看過出来ない。しかし、これらもその配布は特殊な範圍に限られた。

次に、戦争末期に臨んでは、謄寫印刷による報告類の出現を見たことも、一つの傾向として注目されてよからう。例えば「京都大學理學部動物學教室・大津臨湖實驗所生理・生態學研究業績」のシリーズはこの好例である。これらは發行部數は多くなかつたが、上述した學會機關誌或は報告類の刊行不振に對し、相當補填の役割を果たしたことが認められる。

なお營業雜誌又はこれに類する定期刊行物に於ても、若干の變遷があつた。「科學南洋」は改めて北隆館に於て發行發賣されることになり、面目一新の1冊を迎えたが（昭和18年）しかし以後は刊行を見ないで終つた。又我々には馴染の深かつた「植物及動物」（養賢堂）も、遂に廢刊に至つた（昭和19年）。なお全日本科學技術聯盟で企畫された「生物總覽」は、遂に戰時中には發刊に至らず、終戰後に實現を見た。

### C. 出版界の大勢

上に述べたように、學會機關誌及び各研究機關の報告類は、一般に不振であつて、研究者は研究成果の發表に、又學界の大勢を知る上に種々の不便を感じた。

これに反し、書肆の刊行に係る單行書類では、上記のように頗る活況を呈し、特に開戰後の1—2年は、黄金時代を現出したことは注目されてよい。一部の人士は、これらの單行書に於て業績の發表を企圖されたが、これも止むを得ない處置であつた。

この期間に於ける單行書刊行の特色を挙げれば、次のようなことが指摘されると思う。



1. その最盛期は昭和17—18年と見られ、19年以後は用紙不足と印刷所難で著しく減退した。
2. 時局的なものが多く、南方關係及び衛生昆虫關係圖書の出現が目立つた。
3. 科學振興の波に乗つて、啓蒙書或はこれに準ずるものも多數刊行された。而してその著者の中には、動物學者でない人も相當見える。

これを要するに、もちろん良心的著作も少くはなかつたが、又その一面では、拙速的な時局便乗書もかなりあつたことは、否定出来ないようである。なお當時に於ては、圖書の賣行きも頗る好調で、購入に一苦勞することが屢々あつた。昭和18年以來、新刊書は「新刊弘報」に登録されたが；これによつて刊行を知りながらも、實物に接し得なかつたものが少くない。特に地方にあつては、輸送の關係でこの弊が多かつたようである。

## Ⅴ む す び

以上を總括して、本期間の特色を窺うならば、次の諸項が指摘されると思う。

1. 日華事變の行きづまりに當る昭和16年は、各方面とも一般に沈滞氣味であつたが、太平洋戰爭勃發と共に意外なる南方新天地の出現を見、あわてて切り換えが行われた。
2. 今から考えれば、全く一時的の戰勝景氣ではあつたが、とにかく各方面とも活況を呈し、研究方面でも最も實績の擧がつたのは、昭和17年から18年の半ばに至る期間である。
3. 昭和19年以後は、戰局の惡化と共に不調となつたが、その影響は意外に深刻で、戰後の立直りも遅々たるものであつた。

要するに、我が動物學界の動きも、國家情勢のそれをそのまま反映して來たわけである。これは當然な歸結ではあるうが、顧みて感慨なきことでもない。

顧みて我々は如何なる教訓を汲み取るべきかは、大いに考えなければならぬ問題であるが、それは暫く措くとして、この期間に着手され、しかも終末を見ずに打捨てられた問題を早急に解決すること、當時の貴重な研究資料を何らかの形でまとめておくこと、新情勢に對應した新しい研究体制を確立すること（これは相當具現されては來たが）、などは差當つての問題として俎上にの

るものであろう。全動物學界の總意に於て、一日も早くこれが解決されんことを切望する。

以上は總司令部經濟科學局の指示により「太平洋戰爭中に於ける日本の科學技術史」の内動物學部門の一部として作成されたものであるが（昭和24年2月頃稿了）他の諸家の執筆した部分と纏めて出版される計畫が中止になつたので今日まで篋底に藏して來た。今取り出して読み返してみると日本の動物學界も大風にそよぐ葦であつたという感が深い。私達は幸にこの戰爭にも生き存えることが出來たが、物質的にも精神的にも深刻な打撃を受けその打撃は今に至るも尾を引いている。不愉快な思い出が、それを再び繰返すことのないよう我々にも我々の子孫にも無限の警鐘ともなればと念い福井會頭の記念號に掲げることにしたのである。同先生も我々に劣らずひどい目に遭われたお一人である。（高島追記）

## ジャワ産サソリの調査\*

高 島 春 雄

財團法人山階鳥類研究所

Notes on the Scorpion\* of Java

Haruo TAKASHIMA

YAMASHINA's Institute for Ornithology and Zoology

### 緒 言

私はジャワ産サソリ標品に不思議に縁がうすく後述アオサソリを何かの展覽

---

\* 東亞産全蝎類脚鬚類の調査（其の二十三）